

# 湘南慶育病院

## 症例概要 症例概要

患者：70代後半の女性

病名：急性期散在性脳脊髄炎、症候性てんかん

入院期間：2025年8月下旬～2025年10月末

### 【経過】

2025年6月中旬 意識障害にて急性期病院へ搬送され上記診断診断。

2025年8月中旬 当院回復期リハビリテーション病棟に転院。

2025年10月末 施設退院（在院日数72日）。

### 【生活歴】

入院前独居、ADL自立。家族とは疎遠であり、団地で過ごしていた。カラオケが趣味であった。発症前は週3回デイサービスに通っていた。

## 内 容

---

### 【入院時】

入院時より不穏症状が強く、スタッフの声掛けに対して暴言・暴力行為あり。物取られ妄想により夜間不眠状態が続き、同室患者に対しても、攻撃的になる様子も見られていた。身体機能としては著しい麻痺は認めなかったが、廃用性の筋力低下を認めていた。また、身体介護に拒否的であり、リハビリに対しても消極的であった。ADLは終日オムツ対応であり、センサーコール対応となっていた。

### 【チームアプローチ】

#### ①概日リズムの形成

落ち着いて日中過ごし、夜間就寝していただくために、入眠導入剤の頓服を開始。また作業療法士の介入のもと、朝の整容動作を促し、身辺動作の活動からご本人が主体的に生活リズム形成が出来るよう促した。

#### ②トイレでの排泄自立の支援

身体介護に対する恐怖心に対して、リハビリ場面でトイレ動作の手順確認を行い、介助方法の統一を

行った後、病棟看護師と連携しながら、病棟でのトイレ誘導を実施し、本人の原始的な欲求に対して対応しながらご本人の尊厳を尊重しお互いの信頼を形成した。

### ③ 余暇時間での趣味活動や他者交流の支援

心理士の協力を得ながらリハビリにて小集団での余暇活動としてカラオケや塗り絵などを提供。自室や食堂の環境をご本人の希望を傾聴しながら環境調整を行った。

### 【結果】

日中夜間を通して不穏症状が強く、危険行動も多くみられていた為センサーなどを使用し、ご本人の尊厳に配慮する事が困難であったが、概日リズム形成が行なえたことで、夜間の暴言・暴力などは聞かれなくなりご本人の意思に沿った生活が行えるようになった。また、排泄に関しても拒否的な言動は聞かれなくなり、本人より自発的に尿便意の訴えが聞かれるようになり、トイレ動作の介助量も見守りで可能となった。余暇時間についてもご本人の趣味・施行にあわせてカラオケや・ラジオ体操を取り入れることで精神的に安定し活動的に過ごして頂けるようになり、結果としてご本人の主体性を引き出すことが出来た。

### 【関り】

主治医…病状説明、方針の決定

看護師…生活状況の観察と共有、トイレ誘導

介護士…排泄支援

セラピスト…身辺動作指導、廃用症候群の改善、集団活動の提供

心理士…集団活動前後での聞き取り

薬剤師…睡眠導入剤の調整

医療相談員…サービス調整、退院支援